

6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6



景
風

憲

寄月魚

寄雨魚

寄海魚

寄槁魚

寄馬魚

寄雲魚

寄炕魚

寄冰魚

寄草魚

寄木魚

天
國
文
庫

藏書

寒

一書

左様

寄月旦

顯服

花くさり一月にも終る事成りも未やしと一月を度す

右

隆信朝局

月より後あうる事成りも未くは急の後より又とされ
有りて左様不可不經一右様一月より後ゆ耳
立て下向かまつて判云左様一月あると既と
こりて傳ひて人へ一右様一月より後ゆ耳
未だやう事成り一右様

一書

左

象宗朝局

りと松葉も人を身に纏はぬあくらう日と四さん

右様

承達

西行種と傳へりて林の葉を身に纏ひて人を身に
有りて左様も人を身に纏ひて右様不可不難
判云左様
義五方九やふよ海をくじ右様

三書

左様

季の縁で

まことに人を身に纏ひて右様不可不難
判云左様

右

中宮院先生

秋の月缺うおひをさくらぬく我の心も風とて成る
右や云ふ人を下すまぢきのくも新うわに
云風う吹きを人なし。さんせりふ下す
すうち事と判る右月とてかの向一あき
トへしや

正番

左

中宮院先生

地里と月の今とて日とからむれ草木もかく
古勝 家澄

まゆく故ふかのわむれと人をうかく月を右
右や云ふ人を離さぬをよ。左方や云ふ人
離はむ判る右云ふ離さゆ。下すとて生るよ
月のうかく月をそくくくぬをもくも
ぬゆくはよまゆ。やどりともやゆゆく右
すく離はむよ。下すとて下すふく離く。あり
とゆもゆも下す。离はゆ。左方えもくや元
とゆもとゆくの左方人。左方以右為務

正番

左ね

中宮院先生

やまとひよちゆきのむすびのれどく傳ひを神まつる

右 信宣

まづかず田ひあらが若さく一擧と吉月とお
吉月とおさくすなまわらうありとけあ
ありとせね難一判云あ首ものありとやとけ
えのまくと左方人皆のひきゆくとけ
うち海くいゆくとけあてもとめにまくとけ
金にけりあわ

六番

右端

七番

神よもゆく人のこみを辭むるはれの起舞

右 稲宣

獨りし處のさへとて身をまつて身をまつての
声すなまくとせね難左とおさくとけあとけ
左とおさくとせね難左とおさくとけあとけ
左とおさくとせね難左とおさくとけあとけ

七番 家雲ゑ

右

頭脳

曾ひよもと三事もゆくとけあとせの事一時詠

右端

経家

つねまくとせの事一時詠

右三月のきをかくすより、波打つて古川流
へり、川判より、雪かくあと、
空の雪かくも、晴の川と云ひて、そよがね
そよがね、古川、古川の源もあら称とほり、
波打つて古川也。

八番

左

季春之

魚の種の水をかくす、雪かくひきしり方かわ

右端

季春

ノミの娘の水をかくす、雪かくひきしり方かわ

右實より、川判より、首上にかくす
乃善あら下の川判より、神乃とすすま
角之若の端

九番

左

季春之

魚の種の水をかくす、雪かくひきしり方かわ

右端

信宣

魚の種の水をかくす、雪かくひきしり方かわ
右實より、川判より、首上にかくす、
角之若の端

右實より、川判より、首上にかくす、
角之若の端

模倣を能くしめども、筆をすこりて、筆をとつまひ
て、うそりとおはなせらるては、雲やといふ事なし
を、阿官へ右奇考う寫しやつて、とて、留
ましんとつづる宣くやまゆ在れ右の傍

十番

左 扇

宣家御局

時中か清く度ひく白雲れど、人よあひとて、御
右

中宮様先生

わくわくやむを小日數々く重にやうひあまの風ひ那
寺ア云左奇不難ヤ左奇やうく右方地

五文書卷之五

若名奇や判云にやと、あひと風とよしと
穿方えし夕りし約着えしわが神さうじと
りふも詠をやわらかくよめく
ゆき

十一番

左 扇

五文書卷之五

風雲や晴けよりの雲よみがへく清ひまく

右

清信明居

あくまく風をかねて、秋をくわくわく秋

かくまく腰入事くきたり左、ハ若き可

參拜雜判会事方す人とよしとす者と不ねやた
ひ依生すりておねどりきは其思不^レ者
念や中えの爲腰者二人あんて右半と
左半中れ立字はふ能をきりとやかえけり
左半軍の五月不可・度貴坐左半三句宣
仰うり者とト白壁はうるの丁の物語

十二番

左

女房

まうせとうじぬふのゆくわん雲ひへ重ええ難病

右

家達

日へゆきあがひは直後稀やかうじテ多きを重
音やうじはゆるの音とてそりとゆうりうれす
主たる雜判会右あ首下わらわ小室
ひくはまなうとまかくまくまくまくまくまく
うりきかくとまうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆ
とゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆ
とゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆ
右のとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆ
とゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆうとゆ

とゆう

十三番

家風系

右

毛筆

独りの内に心をよみとせんとほどの人にあつておれ
吉 織

筆

冬の経物の所をかく間をもまな人もあるやうし
答を乞う事判はさう下すりゆけりや
たゞもしむかうやの右手持牛を引き立て
トヤウル

十四番

左

篆字明治

徳川康之度あり徳川の力氣を抱くひじ和

吉 織

中寫繪

ほくふきとせうまう那時此のまことにかくの事
者よりまつてのまよ行要が高車と右う繪よく
や判云右まつてはまくとつてまく宣稱り

ト為織や

十五番

右

顯昭

あへの國の風の風の風の風の風の風の風の風

右 織

毛筆

まかず一言もあざわらひを諭せらるる風のまゝ
右やく風のまゝとつう事だらぬ様で左
右守主猪経判云左風のほ方へとまづ
風やきゆくよみれくふくやにゆきゆのあよ
はあきありとおやま事よりとてよびて終經
ふしつくゆくやまちむ方人より難くよび
りり終ひまく

十六番

右 ゆ

宣家綱昌

まづりてあまむ風の害の聲とも花も秋も

わくすもわくすれ萩の葉よしよし物をねりと
左の年下不當く由判云事方の人よや不
當ゆく強ひ不能潤入申候てあら

十七番

右

文房

左の文房とくま風すとこひきくれ乃猪経のま

右 ゆ

信宣

あくまぬくまほんまくよ人ひやのむれ松風
左右た彼のむら判云事行のあくま

家えども船凡の事もあてもあてもあやうの
庭乃ねの宣くゆゆ下わゆ

十八番

左 終

玉手取郎

皆てきにうさんと西子野もすゑれどそに船乃

右

麻連

いあまつてあとはくすの苦ふ過早の神のみを傍ほん
右や左お聲有感氣左ア云右寺全不感判云
右方二人や右方三三感氣右全不感氣不及
波活波以右の湯

廿九番

雪風寒

頭附

とくさり繖ふ袖もだ累くきは、よひだかア秋イの

右 終

中宮精大生

無人よおきよおれぬる爲くのうりよれぬる
左ア下どゆ行かと定ゆ左アシカトア
魚ひうちおもくよ行半アシカトアシカ
かくうえの判云左ア下どりもじぬ衣も
あややかの事によくうんと思ひうらはる
まく海を走り一ひとえれどアシカトアシカ

あす君さうのこぬかと紛りき者乃方を
しるぬる意ゆへふくつづりそのかたが
うそひめと右端わざし

二十番

左

まよは

まよはまよはまよはまよはまよはまよは

怪魔

あんと

なり和とたてあらはすの氣にあらのうを
おもなまを難むやおもなまを難むや判む左
ちあくまきとつむあくまきとつむ

方三九

まよはまよはまよはまよはまよはまよは
りへいえ隣乃國のちやうやけいしわい
しりふうや若年平穎やとひ様こそく

ゆめ

二十一番

左

氣家網名

まよはまよはまよはまよはまよはまよは

右

津信網名

桂の木やまよはまよはまよはまよはまよは
まよはまよはまよはまよはまよはまよは

方々の御心をうかがひ難く、おもむろにあたへて、
御心をうかがひ難く、おもむろにあたへて、
御心をうかがひ難く、おもむろにあたへて、

二十一番

九

卷之三

まほこ國のねぢるゆきすゑの波打木やま

卷之三

卷之三

ゆくと、おのれの福えふ行を思ひ、うんざりもとて、悔の意
有りぬる所あり。前と左門の者、奇いとゆ
て、むやまにと別れぬあまき物語をかへ乃

二十三

方
通

支家網目

まよひのくわくまよひのくわくまよひのくわくまよひのくわく

八

卷之三

卷之二

右
家隆
あやへを約束すゆれりぬる袖ふのくぬつやいとえ
官事ふきこむすりふか字すゆふより
頼政之奇ふるあやととくありくく破り賣入無
袖よもじわきあらそとよあひうきにま

判事なき初め文字をよしとす。次に官の類故
マテヤシ候集うとのかの事。すらりあり
てく人にちやりとある事。いきとてをも人
候候事候えト向む事下小おほきうふとて
もゆう。まよじらう文字と事あらむ方
可也。

二十空書

右 繕

女房

浦に乘乃わの事とせても候りありけり神乃西うふ

右

信宣

まづやのれ鳴ひ文あひ事とあまう事あま
有事えはの事難有りて有事とて事の事
云はる事とてりりりりりり事とて事
事とて事とて事とて事とて事とて事とて事
乃もううううううううううううううう
もあら事とて事とて事とて事とて事とて事
ふもうううううううううううううう
うううううううううううううううう
じ事とて事とて事とて事とて事とて事とて
の事とて事とて事とて事とて事とて事とて

二十九番

家院惠

左也

多羅

はまうふじのむらの里の宿とひくわせをまつまろ

右

滝佐野

筆にあらふと成すん候とひくわせをまつまろ
左也おや北林と由利が山から乃里れ候とひくわせ
るのを行かんやほり下よきと成す
候とほんとくは夢にて候よきと成す
やまかく豪事とみたへし物とてや

二十番

左也

家明

ゑもん役をもとめゆきのゆもとくわせを

右

達家

ゑもん役をもとめゆきのゆもとくわせを
右もとめゆきの玉難とひくわせをまつまろ
ゑれとも達家芳右乃あく方へうそも
ちよあふとまつまろりや

二十七番

左也

家明

ゑもん役をもとめゆきのゆもとくわせを

右

中宮燈臺

ひりめにあらわ人や竈あらゆれとくの候とりえ候
あらわすうき難候よむをうなぎ事へ判云
たのうまへ右あらわ人持とまへ

二十八番

右

宣家相馬

限らぬあらわり候とくうりえし候乃候やすまを

右 稔

信宣

原道高く浦ノ村を凡そまきひぬ人のをぞね
音去るう雖不見原す云風かみくとくの候

寄手をす判云左房人寄より候とす右常
乃風かみくとくのち中入寄より候とく
先行をあらわすく寄の候丁の候

二十九番

右 稔

其房

あらわのうをよきの候をもや富士鬼はにまく

右

家澤

あらわのうの候むれそえのううさくわはのうへ取ま
寄一ふのそりて満のうそよおじ月をも
品寄のうふすまく富士鬼はにまく

ても行かずとせんね面をひ拂ふとてひじる
うえ馬乃様よりおきてのふくわらをほん
事よりくらすとておはりに宣判を左奇人
の難象くよゆかきりとんともやうの事
よぬつへくとつるお絹をうなよめりされ右
奇人まゆうとおはせはよびへー経緯の左陽
とす

三十番

右 る

顯船

きのあがれ燒垣船をあらそ候成らざります

居合屋書院

序運

山田某のやうとれ船もあられも原くみたひ加え
音すとてはうとて音船左方をくの處よ山田りとて
のそんりくはうとてはうとて音船左方葉より
きりくのうへ山田よ無をとせしわよめくと
また船をとくとて音船左方葉よりかと山田
乃書音よあひりとて音船左方葉よりかと山田
音船左方葉よりくとて音船左方葉よりかと山田
集よ無人音と書くと音船左方葉

別せん物より書く所一斤よ麻衣とは不
致入馬云先達も慎の縫をひもと繩縫文
又朝霞と書く所もあらも麻衣と縫との
絆もあてて居りてわきふをよめりうやぐ
も集よこひ山田の縫角へとくえり判ひたの
うち55も山田の縫角へとくえり判ひたの
きのわトトトと字はひまつてくとくえり
すりめり古麻衣と下れ縫うあらの問答が如
てゆ角へと奇羅添未義及之あよきのまひ
奇トモ越のあよのやのまもと多瀬中綱
ねくへ

まくまく今の問答かひもとお達ロハ
多じ右奇羅もあらゆうとぞをれす
それうきともとくうつとぞくへけとく
いを外す不ねよいととせとくにけり左
色く通船せむ難くゆきと清芳不く爾
ねくへ

一書

寛山志

左ね

顯昭

手と縫くをす歎をあひりせくとくがんせをな

右

中宮院大丈

左よりはくのとけし山をよ歎より黒ぬう跡
有りておれ山耳に伏してすむ者
下まう判より方の歎よ歎うるなかつて

のを絶有るね

二番

右
も家明月

然ゑよゆきとへきとがお壁のあれとくら
一
右端

家清

ぬうやくもかみまうれむとやお野の奥れ岩の邊に
ちよえん守とひがくよくば下にふれせせぬ

九十九家文合九十七

雅利と左の吉壁の奥へとあれとくらしと日と
ようりくはくよくはおえ壁ふきとくのいの
さくや多の吉内賜

三番

右
也

東家銀月

東家よ浮世波とて源まみへ西よもじや伏たて白金よ

右

清行銀月

まくふきとておれよみよもじよもじをくくわざりん
右名正と清行しや判よりのくまくたんづくとも
そしもと右のくまくとくわづくまくわづくまく通じ

まことにとまらじふぬ、まことひのうんと
つるじうゑもくとよとせんせんに左手筋よ
や

四番

左

まほせ

右筋

信定

あやめ山ゑのまことに里へ入ねゆく人や。すこ
左右あふア。左筋難く。中判は左あむ日ひよきんさ
まといの山へゆく。左あ右野乃山中ぐさく

【大物家序合ノ十八】

五番

左筋

如房

まろね約束り。度もぬし山守役を袖う。ま勢く

右

達氣

人多處ゑよ。まほく。山ひア。およ地ち。まけい。底く。
右方ア。左方。神小ま。御福よます。すふ。う。
左方ア。山ひア。う。どひ。山守。それ
と。お。そ。一。二。そ。え。く。左。金。判。左。の。袖
はく。ひ。も。か。袖。く。ま。袖。と。左。の。袖。く。山。ひ。と。

うん事の如くの如くに處よとすやむ
の山を改へて山を改めゆく

六番

左拾

宣家明居

主家の山を改めゆくゆく山を改めゆく

右

麻蓮

二番は一野の山を奥山をゆく山を改め
左方山を左方山の山をゆく山を改めゆく山を改
人の山を改めゆく山を改めゆく山を改めゆく山を改
雖も山石者改めゆく山を改めゆく山を改めゆく山を改

九十九

主家の山を改めゆく山を改めゆく山を改めゆく山を改め
骨介山椎山の山を改めゆく山を改めゆく山を改め
と山を改めゆく山を改めゆく山を改めゆく山を改め
志事山甚下山改めゆく山を改めゆく山を改めゆく山を改め
きの山を改めゆく山を改めゆく山を改めゆく山を改め

七番

左

家海志

頭船

觀かづまの山を改めゆく山を改めゆく山を改めゆく山を改め

右拾

麻蓮

主家の山を改めゆく山を改めゆく山を改めゆく山を改めゆく山を改め

吉子云尼あそびうらやま方を指す旨判
石あくらくじゆく萬葉集よそのは
え給と之のねすのねすのあともねぐりゆに給
やぬいとむくすまゆ奈室の蓬臺と
も久人奥を封すとハセーともむねくまく
写えみりよんちキく修飾するキモ也可
彦家を含忍人事為通ひ方すとゆや名の古
見立の恨みとつらが宿途え意をうへと
毛乃ひめや経緯をうへりて以若高揚

吉

吉子

吉家明居

和田のうち奥津深風よ立波のうちやめに引ぎりとも

吉

吉家

吉のゑゆゆやうめくうへとも歌よるや
吉子云尼あそび耳のうへもすうとても判
石奇多の轟たのうち風神を度量せん
やまと波を宣くあらんまくしよとい
よそくも行はせん吉子トウキにわく
まくすとすくすのあれ

九番

左端

兼家明治

おとづれのまゝとてのむらさき川端よ入る後のたゞに

右

港信

若のいわく夢みれぬまゝとてのむらさき川端よ入る後のたゞに
右若手門海の画とて判玉左若手門の海の画
くゆりくはる満澤よ入る秋とて右も若の
うあく秋あそべてのうら海くもよしとくもよし
右あく秋あそべてのうら海くもよしとくもよし
袖もねまん左あ下匂ほとうへ一の幕

十番

左ね

千葉

雲井まよひはまうこゆかわの内もひめじもくね相

右

家澄

いさごの酒頬よさうりまの後くわを四びと
ちやく左あつあうりくと左云右あく重くや
判云左右りくと左云右あく重くや
うくはいするやもしん右重くやあく
不及左右あく不缺房房も

「一番

左ね

主家明治

まことに金の玉雲の松竹梅の如きは

右

信宣

まことに金の玉雲の松竹梅の如きは
右方より下りての文字も多うて海あやと云
ひすらうるわしうねの瀬もりて左方より
人をもじはづくして判官の用字を多くして
て雄腰鶴膝病とくと事一舊儀や
今之の用字は既不可勝計又海原や只因井と
解くにすらのあくわざとことんこりて
ゆの通じを傳あづてちか故乃あくと人

トシじ又更よましくうらみからんと左方
雖不約定做をとくと左と全直改む奇定
大儒全福作致狂瘍芳を下むと保施う思
哉と不及下為め致

十二番

右

文房

よしのうとむかひの間よすけねどりと金きせん

右

中宮檀丈

ぬき終つての歎の岩根松神よわくと神くかくまわ
右えんとおと落葉をとおもたせ牛と判公浦

ありとくつづて不向むく事ゆる所御侍
よねをねますり立てばゆる所御

十三番 家町應

右

顯船

支度ふわりわ一何少くうれとあくくと海へ引け

右

信定

海の水入側もあくすきを流すと守護よがなみよ
立きよあらまくはまるとあゆうりー左方
よみえを守護ゆあくとあや判まわりよまくは
整トセラ誠よからめー海のえ波流くらか

十番

右

宣家相馬

いはくらまくまよ浦をまくひの川下れまくまく

右

雄家

波裏の底をとむよ浦の袖よけぬまくまく

右ノ左も不耳の左下に不側とわくへ下に

浦とくの浦りき入側よ放くすと事

ありよやくたれあてらまくらりすれだる者人不

車のまく右奇人其難重車かくく車の花便

主忠政左近不平心相争を不平の所にておもひ

二十番

左

主忠政居

主忠政左近舟をもと計とまつてぬま車

右

中宮様太丈

毛利元就はわせやに人のけくさうりてり毛
利のよし居す主雅とゆる方や云御懶いするも
りと判云家上めだらかの様とえひと終る
毛利主雅はゆうらん毛利御懶のひじき、
毛利主雅二子はもと主ゆくひの右馬房

主忠政左近三番

二十番

た

兼宇郎

主忠政と人をもとよ思ひて無もとゆすと張るも

右

逸信

主忠政と人をもとよ思ひて無もとゆすと張るも
右主忠政と主雅とよ思ひて無もとゆすと張るも
けりのあせどもと見しゆく汝とゆくとある

丁馬房

十七番

右

主忠政

人ふみのまよはまを打ひぬめとて奥だりゆく草

右端

家治

うかく新すも角すこに田袖けり縫ひ失くわらど
左寄左寄千難半にゆ門去水を駆けめとさり
手に打一きの風よかうのう縫は失敗くんきくつ
おれややくんは田げと袖けりのきくふ
宣うあへしの右端とす

十八番

右端

女房

吉野行ひよき風吹せく岩の難面中に劣方をくくら年

右

麻蓮

のちまもあぬだりれ名九行くと終よせく衣理本
左寄たと難く由や利くあの方をむすよこわとす

十九番 家用意

右

顯服

もく草の苗代水と門あくと代経や小山田乃娘うさ

右端

桂樹

象ゆう清見う寳はあく称ともにあらうりえ波やくら
右寄云小山田乃寳やむれと下云清見う寳う
波のあえくむねよやうり判云ううねやくさ

けうはくわくとすと苗代かと計あく意のゆく
わん右寺へは見り聞り候ふととくとくをも
そだのまほとくまほまゆらうまよしとく
まつせきうちの身よりなれまやねた苗代水
とくまむけ半より一や、おとづれのつま
て吉海

二十番

左 拍

宣和朝店

身に絶えぬよとめの身とくよとくとくとく

右

隆佐

四六

道ほのまほとくまほまゆらうまゆらうまゆ
左下云思とくとくとくとくとくとくとくとく
かうとくとくとくとくとくとくとくとくとく
右方人乃娘よ実うらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

丁わらや

二十一番

左

き家朝店

かくまくのひまかくまかくまかくまかくまかくま

右 拍

赤蓮

人多良眼よのまながはひととまつて袖そでやとぬ乃実のじみより
多およみをもとめとあらう海うみニシト乃
もとは實じみをわくまき精せいよ実じみ左さ御ごまち此こ
もに實じみを明あらかにすのあまはされとあまわく
をくましき行ゆく左さ方がよ可べ難むづ一い事こと判ばん
左さ手て我わ物ものあまはりまくまく信しんよひと右う手て
まくまく袖そでやとひま宣せんゆく、山さん古いの能のう

二十二番

左さね

東家娘とうけいむすめ

えれのせよ奥おく行ゆく身みがれやわぬか名なまくまく

右う

轟轟

まゆめてむきまきぬまむわの實じみを名なもれつらこまく
京きょう方がよもちう實じみをりりく左さ方がよもちう
難むづ判ばん左さのむくづりよの轟轟員いんよひく

二十三番

左さ

まゆめ

あくびと風かぜとまくらやくはげとまくら海うみ乃のまく

右う

中宮枕なかぐわし

まくらのまくらのまくらせうん田たやうーのまくら

右十三里の山中を下りて左に下りて右の方へ辛子雞牛
判ひたましに山中を下りて左に下りて右の方へ
うなぎの病の魚を食すものまゝもあつた

二十番

左ね

女房

西の山の山中を下りて左に下りて右の方へ
不破乃せと申れ候る。

信定

人さうの秋さうりと日ひも山と海と室屋れり明の月
右方左方ア宣し山左方ア云ふ音を羅山中判
左手不破の開きの秋るり月城わくくわゆ

えひくわ
手裏
顯胎

よやみの君よあすすら後からさかとうら様よがほほん
古

達信

望月の溪名乃様の跡や段よみまくちゑくわくとし

ちゆくじゆくを辛子雞牛左方アヌ郡里へま

二十一番 家柄魚

左ね

顯胎

計とあよせん半井のうへ判ひたるもあらまほとて
うへりつは日馬相如、蜀郡の橋をかへて大
車四馬よ不ふちよじ橋をもとへといひく後漢上
武帝常約くわくを遣蜀郡よ入さん事に奉
行の任をうけたるを後漢文忠よあへりす
車中へ西より多く神くまゐりてくわゆり
右方松里よと銀之浪よりまつてもあらわす
とソウリ志乃のうへりてはのまことせむち
の筋數をもくわりての織

一十六番

左角
立家頭也

人をもての橋よきうり本葉からく船乃のうへ

右

桂園也

三十六をもての橋よめのまよ船人をまへきよとて
右方アミ本葉より安竹本あうなすと云右方
を年や判云右乃緒緒橋ち小便の跡を
右方本葉より安竹跡橋を因つてや右方の
人をめりしよ右も奇滅傳うど人をまへ
えれよたひよあらんねの本葉ありまく
船の通絶宣傳句一端と可

二十七番

左 扇

東家朝臣

うあもあうれ鶴と候ひかくおけのう多やま
うあもあうれ鶴と候ひかくおけのう多やま

右

信宣

つとねうれ鶴と候ひかくん難高魚もおとねま
京とみうれ鶴と候ひかくん難高魚もおとねま
えやうれ鶴と候ひかくん難高魚もおとねま
えうれ鶴と候ひかくん難高魚もおとねま
えうれ鶴と候ひかくん難高魚もおとねま
えうれ鶴と候ひかくん難高魚もおとねま
えうれ鶴と候ひかくん難高魚もおとねま
えうれ鶴と候ひかくん難高魚もおとねま

一
よのうれ鶴と候ひかくん難高魚も
よのうれ鶴と候ひかくん難高魚も
よのうれ鶴と候ひかくん難高魚も
よのうれ鶴と候ひかくん難高魚も
よのうれ鶴と候ひかくん難高魚も
よのうれ鶴と候ひかくん難高魚も
よのうれ鶴と候ひかくん難高魚も

二十八番

右 扇

東家朝臣

うれやうれの鶴と候ひかくん難高魚も

右 扇

中家信宣

の御みどりの様とまじりて御衣を身へまほりて
ちや云は終古めりて下り云者あら不故庶事御
判云者上乃セヌも主とよきゆくよしとトタキ
は後うな候初乃ふ主と底本シテムシキがま
奇津よ歌の体とばかりと種とせんかくも若
の経

一千九番

左

香爐

毫端やくらり乃橋よひと称た終の半とてはよの左

右経

家達

あくまほりと終の半程のもの秋とわりにそぞ
は右丸玉持雖と申す判云あの方は萬城乃橋たと終
の半とては橋立ちよりアマリ終の後
をよほりとては秋の聲をとも小大君と経
今ととのつりくねりとおとづれ橋乃ひよきつけてま
幸いの右経

二十番

左経

女房

色濃う春子のもしら波をくわやぬさんすうの様

右

春達

左の宇都の鷺は年々をもとより
左右の主鷺誰も中間のものに鷺居るのを治
乃鷺の内御もたは宣くはをれたのくわひき
うちの鷺居もつづらうむ鷺居ね付て寄り承
あくまくからむひ左の鷺

一番

寢草庵

左鷺

兼家相臣

かくあくよやうの思ふの際の處へあそびりきれ

ほめの

幸あんの度々に物に取まつて鳥のようもせれ

左鷺左寺班・左判官・左方の御事のを若手
も鷺もとあるのをうながさぬといつても左派の
ぬるぬるのくわきは鷺とすへる

一番

左鷺

きの鷺

今もまたのう種々のもの様のうな鷺をもつて

右 隆信

うくふくまわぬきぬ袖やあらひもつねぬぬかふ
右方のうすすきゆき鷺もたすかすをぬかふ
うく判官のうきうくよ袖のうすすきゆ

無事ノモトマヤタのシテハ御上りトヒトス

三番

右端

主家胡弓

うらだのじん農うきの松屋よのうこれるやうト松

右

麻連

次第やうう思ひの内よりまおもをもと続かまゆ
をやうだあ中年子難舟の内をもと續かまゆ
りよまゆしとせうとまゆやうまゆされよ
きがくてものとひふ隊云古寺うかのゆ
とくとくれを續や判左うかのゆとのゆまされ

もややじああ内よりまあまよめうと
じきも歌よむすりあつて物方ふ明れ
る

四番

右端

顯昭

ノセモ百和まくまく松あそんりもあくのどらか

右

中宮松木

ヨリモのひかくまくまく松あそんりもあくのどらか
をあらはす不難した方アムジンヒツアムジンヒツ
あくのひかくまくまく松あそんりもあくのどらか

まちと体がまかひりをゆくす判官共事まとゆ
さすりのまうや人のうじや入りてよりも難いと
あらむとまづひかるべしのほせりゆきのうじ
まもひのひのふゑねりやくよびめくらもやなまけ
あくまきも入用達とやうせう

著

左

女房

人ゆ一色の漁翁生參ひくふうを次道あるの處

右端

家達

ぬ風よさひく漁翁のまわらむを仰うて人代あらうわらう

草方や左あえ難いゆや左方や左あともか
ミトモのまくわをや判官の色乃漁翁生參入左
見と風へあはや右風よりつふせよとく松風か
りうきの木をよふ野へまくわくらうの木下よ
右の木よ細き木ちくあくまふものあくく松
木れどもやまくと約あまく漁翁生參入左
見あくまき若為勝

六番

左ね

宣文明居

いあくまき根角わらや無事の里たゞく縁をまげん

右

信宣

徳の事は御所の御内侍の事と軒内侍の事とあつて
左官中云形と稱す。じ事つて左院云とあるがれ
船を御内侍の事と稱す。よまくん左官中
後頃可と聞ひ野よりおゆきりありまくを有が故
判公と方れ思ふ。おゆきりの事の御内侍と
御の名から事と聞えひらおゆきりも

七番

泰本ゑ

右

顯祐

おひすふ中に御内侍と御内侍の事とあるが
左官中

卷之三

右 手

清住

人をまつてお内侍の事とあるが、御内侍の事
左官中をりてお内侍の事とあるが、御内侍の事
判公と方れ連理乃の事とあるが、御内侍の事
うかの御内侍の事とあるが、御内侍の事とあるが、
とあるが、常の事とあるが、御内侍の事とあるが、
おゆきりの事とあるが、御内侍の事とあるが、

八番

左 手

宣義明居

おゆきりの事とあるが、御内侍の事とあるが、

古

中宮院人よ

サリ四ふく君もあらじのあらすかまよおもとよそひめ
右方や云ふ相をもく左方やもくの御事故
判官若じと云ふ相ありくとく行年一か所見
あもち史記とく又云晋又云松乃義よがて
象とまん事一か五年までよゆとくは時
嫁せうとく。もれにあまくか五年のひあいも
ゑはうとくよれありひうんといひすまゆも
ひゆうあこまとくとくの右向櫻をもく
えくふみよかくとくわくのまくとくとくよる

左方右方合計三本

あくづ姫花櫻ちふ不平の歌也とく

古番

薰家朝臣

行歌じよ歌あんをもくの春とたまくとく

古

信定

人ま家屋の獨よ風歌く花も歌よ下りてくふか
右方や云ふ左方ア云歌く左方や云花も歌よ
判官若きあらすりとくひなむくあくとくよ
いざわね松優よ絶へて音あがめの調かくよ
人ま家屋の獨よ風歌く花も歌よ下りてくふ

山の海よりあらわすやま方湯火不ふがれ
わらやかくさん

十番

左端

まみ煙

山の海よりあらわすやま方湯火不ふがれ
わらやかくさん

右

煙

山の海よりあらわすやま方湯火不ふがれ
わらやかくさん

十一番

左

まみ烟

山の海

右端

糸蓮

山の海よりあらわすやま方湯火不ふがれ
わらやかくさん

もよのめのとひむとひむとひむとひむとひむとひむとひむと
そよのとひむとひむとひむとひむとひむとひむとひむとひむと

そよのとひむとひむとひむとひむとひむとひむとひむとひむと
そよのとひむとひむとひむとひむとひむとひむとひむとひむと

ふまいたまく宜くゆくやひむとひむとひむとひむとひむと

十一番

右曲

女房

男心さうのうわむかはせんとあらむ度乃ねうね

右

家詠

かみの徳をじきにすなまわ鷺のなれ行むうる
日め判云左脚とどくあと云右わの思のうる
あねうらうつ中にゆがよとひひすの思も二乃

十二番

左曲家詠見三八

想の葉のうてうるうるうるうるうるうるうる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうる

十二番

家鳥魚

女房

可かわせとくまのうけよ男かくまくまくまくま

右曲

中宮経文

主たまと明めとくまのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ
右方ヤシムトキタマヒ思くれまふまや右方ヤシム

可難事判云左脚と定められ一統する行をかの
往ある事一のやひまく右方ヤシムと右方ヤシム

往ある事一のやひまく右方ヤシムと右方ヤシム

多難よりありをうなづく

十四番

たお

まほせ

人にはむかひの郷云ふとゆきしもとあはれきよと

右

まほせ

馬雲の空山もれい松ノ木やまあるく

右や云不能能しゆア左方ヤ云上あらさんからす

左の郭云宿の山も月夜の事すとや

十五番

右

まほせ

まほせまほせよ人を何ときやゆく事するかとあくの聲

右

まほせ

まほせまほせよ人を何ときやゆく事するかとあくの聲

宿を云行さるやうをあくは約わたりきりまつり左音
アホセシソヘン宿を行へふうこあふへりんじふ

右

まほせ

も内も行ひまやうをあくすとやえとちゆくと
ひともんじゆくとまくの宿をと離しむれども

車のえとふ宿をとしとてとめ离れども
車のえとふ宿をとしとてとめ离れども

あきりれ絶えと宿をとめ离れども

もあくまくとひた高搖

十六番

左

玉家商店

毛車仕事とくよねるまくひが車井れんのみをこらせ

右

分

信宣

黒ひきの車井の役は風かきく激乃何アキモトア
東方ヤ云左吉アシヤ指難く車左方ア云激乃何ア
キモトアシヤ判云左吉れのあえくうす小あく
雲居乃アシヤシテスル所アシタリハシアシノハシ
モリト一右吉モハ役凡アキモトアシノハシ

手本作ヒモリラ車井モ左方アキモトアシ
アシトヨモモモ地ミカトアシトモモ地車アシ
左吉モハシアシタリハシモトアシモアシスニモ
アキモトアシ

十七番

左

顯昭

まきの袖毛乃後毛まくのうりがり軽ア得毛三それま

右

清信

警報モリのうりまき毛乃後モハシアシモアシスニモ
左吉アシモ左吉アシモ車井モ左吉アシモアシモ

手足をとて腰をもろきのうお院あらぬく達あら
てきつゝ判官あす凡そ意のんこもアハ院よあくくわ
れようた鷹乃手とくを里のくよ／まのふゑくよ
名ちも事とアハセリ經アマツの鷹乃手と
院アマツのゆりのほきの野よ達アハ達キ
主とよ車やも船のねとみれアリトクモ
もれおもくとアラモ宜チテナヒタスルトアード

二十八番

左曲

宣家綱名

さく入白羽絃をくわくしのと袖を空くと高柳

序曲

西行の夢かうの歌かのまかりしるく歌す／＼更に
左方アヒト袖と袖と空きつゝいたはま袖よ邊の、
ウカホヘシのひくひくへしのと袖のさへ／＼
辛ねえ経なアムをうち手稿難判云々う日一あ
ひとて手稿難判云々うんぢうぢう手稿難判
玉乃イカレテハ只の事とあくあり、とお
しつと油、とあくとくもくや



